S.　Ashina

１．オリエンテーション、導入――聖書と聖書学・考古学
２～７．旧約聖書――宗教史的背景、創造、契約、王権、預言、知恵
８．新約聖書１――新約聖書学　　９．新約聖書２――神の国
10．新約聖書３――イエスの譬え　6/24　　11．新約聖書４――富　7/1
12．新約聖書５――国家　7/8　　13．新約聖書６――グノーシス
14．受講者による研究発表１　7/15　　15．受講者による研究発表２　7/22
16．フィードバック

＜前回＞新約聖書学

（１）近代的知のモデルとしての自然主義

１．西洋の「宗教と科学」関係論は、18 世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解、そして聖書研究も、この変動に規定されている。村上陽一郎の聖俗革命
↓
超自然・奇跡の排除あるいは合理化

（２）自然主義と宗教、争点は何か

６．科学と宗教との対立（近代的知・自律と伝統的権威・他律）とは、双方に原因がある。
７．そもそも、奇跡とは何か。
パネンベルクの奇跡論：the word *miracle* refers to extraordinary events that function as "signs" of God'ssovereign power. .... " signs and wonders"(Daniel 6:27; John 4:48)

（３）近代的知と歴史主義

１．自然主義と歴史主義
近代的知の二つの動向（因果律の二つのタイプ）
作用連関と意味連関の組み合わせの諸パターン。
→　自然科学／精神科学、説明／理解
２．「近代」と人間的現実の歴史化
現実は永遠不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。
↓
近代歴史学、歴史的視点
４．存在レベルにおける歴史・歴史化（存在論的概念）
・人間存在の歴史性
・聖書的な歴史的思惟（聖書の宗教が歴史的思惟であるという意味）
聖書的人格主義とギリシャ的存在論、動的歴史的と静的形而上学的、といった対比。
・近代化が歴史化であるという意味での歴史
↓
歴史・歴史化とはどのレベルにおけるいかなる現象・事態を意味しているのか。
５．知・人間的現実の地平としての歴史
倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。
cf. 自然法
↓
価値や理想の妥当性はそれが形成生成してきた歴史的連関（文脈）の範囲内に限定される。この限界を超えた普遍化は不可能あるいは間違っている。といった認識あるいは感覚。
相対性の意識＝歴史相対主義→ニヒリズム

（４）近代聖書学の諸原理

（５）近代聖書学の方法と帰結

１．歴史的批判的方法：文献学＋歴史学→近代聖書学のパラダイム

２．伝承史：イエス→→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集

・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判：文学様式と生活の座との対応）

・編集者の意図・神学の解明（編集批判）

３．様式批判・編集批判から文学社会学（テキストと社会との相関関係・相互連関）へ。そして、新しい新約研究の動向＝方法論の拡張・総合化（歴史的批判的方法を超えて）

４．イエスの奇跡物語（治療奇跡）

聖書学的に奇跡物語をどのように解釈するか

奇跡テキストはいかに読まれるべきか　→　ふさわしい問いとは

５．悪霊に取りつかれたゲラサ人をいやす（マルコ）

６．新約聖書学の代表的議論から：荒井献

・荒井献の新約聖書学のポイントの一つ

・イエスにおける「民衆の視座」（民衆と共にあるイエスの振る舞い）と「相対化の視座」（神は相対化の視座として機能する）の明確化。「民衆と」「権力に」。

・奇跡物語伝承の様式史法則　→　「理念型」の再構成

・奇跡物語の最古層、帰還命令　→　「癒やし」とは何か、その社会的次元

７．ポイント　→　医療人類学

・疾病（disease）：身体的、心的。基本的に特定の次元に限定

病（illness）：精神的・宗教的を含む全人格的態度、複数の次元が複合的に関与する

・奇跡は物理的現実である前に社会的現実である。奇跡の癒やしは家族への帰還で完成。

癒しの社会的次元：関係性の回復という奇跡

和解のない世界、「にもかかわらず」

驚くべき出来事＝恩恵・贈与

＜クロッサン＞

『イエスとは誰か――史的イエスに関する疑問に答える』新教出版社、2013 年。

「古代人が文字通りに伝えた話を象徴的に捉えてやるほど今の私たちが賢いのではなくて、古代人が象徴的に語ったものを文字通りに捉えてしまうほど今の私たちが鈍いのです。古代人は自分のしていることが分かっていた。私たちは分かっていないのです。」（104）

９．　新約聖書２――神の国

（１）近代聖書学における「神の国」論

１．キリスト教神学と同様に、聖書学においても、「イエス」は常に研究者の中心的な関心を占めてきた。→歴史的イエスの探求、「神の国」「終末論」の問題。

２．「イエス研究／終末論」の変遷：「神の国」が常に議論の中心に位置してきた。

1) 19 世紀：近代聖書学の確立期、イエス伝研究、市民社会の倫理の教師イエス

2) 19 世紀末～ 20 世紀初頭：黙示的終末論の再発見→古代の黙示的終末論の宗教家イエス

「イエス伝研究」の挫折、ナザレのイエスと信仰のキリストとの分裂

3) 20 世紀聖書学のパラダイムの浸透：弁証法神学、モルトマンやパネンベルク

歴史研究としての聖書学の後退とそれに対する批判（ブルトマン学派）

4) 1980 年代以降：20 世紀の聖書学のパラダイムの崩壊と新しいイエス探究、黙示的終末思想に基づく宗教者イエスという理解の相対化、知恵の教師イエス。

（２）神の国の宗教運動　→　隠喩としての「神の国」

３．新約聖書学→仮説・蓋然性における結論（伝承史を逆に辿る）

伝承史と二資料仮説
イエスの伝記的事項については大まかなことしか言えない（福音書は伝記ではない）
→ イエスの教えについてかなりの蓋然性で言えること

４．イエスの福音
①「時は満ち、神の国は近付いた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1:15）
②「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（マルコ 10:24b ～ 25）

５．「神の国」の宣教（新しい契約の実現）
国（バシレイア）：神の制定した秩序（支配） cf.国家機構、王国

６．神の秩序←→この世の秩序（古い秩序）＝罪（ハマルティア）
階層性・二分法・対立 的はずれ cf:規則の侵害
関係の歪み（神関係、自己関係、他者関係）

７．神の秩序の実現＝古い秩序の転換＝罪の解決＝救済 → 福音
↓
イエスの宗教運動：巡回・共同生活／論争・教え／奇跡行為（病の癒し）

８．イエス時代のユダヤ社会・地中海世界（この世）：典型的なしかも極端な不平等社会
富める者／貧しい者、男／女、大人／子供、自由人／奴隷、ローマ市民／非ローマ人
浄い人・義人／不浄な人・罪人

９．「罪」＝「的外れ」＝「関係の歪み」（人間関係が歪んでしまっていること）
人間存在（個人／社会）＝関係存在（神関係、自己関係、他者関係）

10. 食卓としての「神の国」。誰と食卓を囲むのか、囲みたいのか。

11. 開かれた共食における神の国：イエスの宗教運動において現実化しつつあった「神の国」は、イエス運動の食卓を見る限り、罪人と食事を共にするというあり方として確認できる。階層的な社会秩序と関係の歪みに対する徹底的な平等主義である。

12. 平等な開かれた食卓としての救い：
人間としての自己肯定可能な共同体内に自分の居場所を見出すこと＝意味の回復
断片的実現と未完成な全体、神の国は生成途上にある。

13. イエス時代の通常の「神の国」理解：預言者的終末論、黙示的終末論
↓
イエス運動における「神の国」の意味の転換＝隠喩化
善人が入ることができる神の国 → 罪人が招かれる神の国

14. 知恵の教師イエス：慣習的知恵（既存の秩序肯定）、転換的知恵（既存の秩序転換）

15. 知恵から終末論へ：人間性の回復される現実をもたらす知恵

16. 理念と現実の緊張・対立（ずれ） → キリスト教の動的展開
「神の国は近づいた」、未だ生成途上にある。

17. 宇宙論的問題設定、宇宙的キリスト、あるいは拡張された神の家族の射程

18. エコロジー神学にとっての「神の国」・終末論

＜参考文献＞

１．ボーグ 『イエス・ルネサンス』教文館。
２．クロッサン 『イエス――あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社。
３．荒井 献 『イエスとその時代』岩波新書
４．田川建三 『イエスという男』三一書房。
５．大木英夫 『終末論』紀伊國屋新書。
６．芦名定道・小原克博 『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社。

＜ジョン・ドミニク・クロッサン :『イエスとは誰か』＞

４　イエスは何を教えたのか

「「神の王国」とは、皇帝（カエサル）ではなく神が玉座に就いた世界、皇帝（カエサル）ではなく神が公明正大に支配する世界、という意味です。宗教概念であると同時に政治概念なのです。そして倫理概念であると同時に経済概念なのです。」(62)

「神の黙示的な介入と神の社会革命は全く違います。そしてイエスは、洗礼者ヨハネの期待した黙示的な介入を捨てて、社会革命の宣言に転向したのです。」(63)

「イエス時代の地中海世界では王が実際に権力を持っていました。一世紀、王権について関心を抱いたのはユダヤ人の黙示預言者だけではありません。王権はヘレニズム世界共通の話題です。これは、いかに権力を正しく人道的に行使するかという議論でした。福音書は、人間の権力の使い方と神の権力の使い方の差を際立たせようと苦心しています。」

「結局のところ、反社会的な挑発と痛烈な政治批判が伝わりさえすれば、「王国」の代わりに「共同体」を使ってもいいのです。」(64)

「私たちが読んでいるイエスの言葉とされるものは、彼の死後何十年どころか何世代も経ってから知識人階級が記録したものですが、最初の聞き手たちは、何時間もかかった話のうち強烈な印象や、上手な譬えや、見事な粗筋だけを記憶したのでしょう。」(66)

「大事なのは、世界で神の意志を行おうと努力し合う人々が互いに「家族」となるような新しい共同体です。」(67)

「要点は家族の信仰ではなくて家族の権力でしょう」、「父親と母親が息子と娘と嫁に対して威張るという、地中海世界の家族の権力制度を攻撃しているのです。」(68)

「うわべは平穏な家庭に酷い暴力が潜んでいること」「一世紀だろうと二十世紀だろうと、イエスの批判には説得力があるのです。既存の家族制度は絶対のものではない、全ての制度は人間を育むためにある、家庭生活も社会生活も神の王国のもとに批判される、あらゆる人間関係は正義と愛のために存在するのだと」(69)

「イエスは、貧乏人つまり実際のところ農民階級全体が幸いだと宣言しただけでなく、一文無しの乞食が幸いだと宣言したのです。」(70)

「一文無しになるとは何とすばらしいことだろう」「ただの個人感覚ではなくて、社会感覚でこれを聞くことが大事でしょう。イエスも農民仲間も、不正な制度の中にいることを自覚していました」、「「罪がないのはホームレスだけだよ」と言うのではないでしょうか。もちろん恐ろしい発言です」、「単なる個人の暴力の問題ではない制度の暴力を言い当てているからです。自分一人はいくらで清廉潔白だろうと不正な社会制度の一員であるからには手も心もよごれているのだ、というから痛烈なのです。」

「お前の奴隷を強姦したりこき使ったりするな、と言うだけではなくて、奴隷制は神の命ずる正義と平等に反するのだ、と主張しているわけです。イエスは、個人よりも制度や構造を批判しているのです。」(71)

「そんな状況でイエスの譬え話は、宗教や神学だけでなく、政治と経済について討論する場になったでしょうか。」(72)

「強烈な隠喩です。丹念に手入れした畑の持ち主にとって王国は疫病です。」(73)

「人類学者は、食事の「規則」は人々の関係と態度にかかわる社会規則の雛形であると言います。食卓は、経済格差や社会格差や政治格差の見取り図なのです。」(76)

「分離された食卓は差別の象徴でした。」(76)

「譬え話は譬え以上のもので、食卓の性別も身分も宗旨も違う人たちを招くことでイエスは自分の譬え通りに生きたわけです。」(77)

「神の王国の分け隔てない平等な性格の象徴として、イエスは開かれた食卓の伝統を残しました。その後、特定のキリスト教徒集団が最後の晩餐を儀礼に仕立てて、あの解釈の伝統にイエスの死の記念を付け加えたのです。」(78)